

2026年6月28日 説教「金持ちの役人」

ルカの福音書 18章 18～30節

先週は15～17節を通して、「子どものように」と題して学びました。それはパリサイ人と取税人の祈りの対比するたとえ話でいえば、取税人のように、ということでもありました。

1. イエスのみ許に來た親子たち（18～20節）

- ①ある役人の質問（18）「**またある役人が、イエスに質問して言った。『尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。』**

ここにある役人というのは指導者という意味もある言葉です。マタイの福音書ではこの役人は青年だったとありますが、彼は指導的な立場にあったと考えられます。役人はイエスを『尊い先生』と呼びかけていても、イエスを主とする心は見受けられません。そして、『何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けられるでしょうか』と質問しています。彼は、行ないによって、永遠のいのちを得ようとしていたのです。

- ②尊い方は（19）「**イエスは彼に言われた。『なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。』**

イエスは、『尊い』という呼びか方に役人の心の中にある問題点をえぐり出されます。つまり、役人は表面的にはイエスに敬意を払っていますが、それだけなのです。つまり、イエスを主なる神としない限りにおいて、唯一まことの神はわからないことを、暗に教えられているのです。つまり、尊い方は神だけです、目の前にいるイエス・キリストを主と認めず、「尊い方」とするだけでは、三位一体である神を知るには至らないのです。

- ③十戒の教え（20）「**戒めはあなたもよく知っているはずですが。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え』**

イエスは彼の求める行いを切り口にして、十戒を敢えて伝えました。それは、十戒にある人間関係についての戒めです。すなわち、第七戒の『姦淫してはならない』、第六戒の『殺してはならない』、第八戒の『盗んではならない』、第九戒の『偽証してはならない』、第五戒の『父と母を敬え』を示されました。これらの戒めはユダヤ人であれば、誰でも知っているものでした。イエスはこの青年に何を教えようとしているのでしょうか。

2. 役人への衝撃の一言（21～23節）

- ①小さい時から（21）「**すると彼は言った。『そのようなことはみな、小さい時から守っております。』**

その若い役人は親から律法教育を当然、受けていたでしょう。そこで少しがっかりしたように、言います。『そのようなことでしたら、小さい頃から教えられ、守っています』。知りたいのは、永遠の命を得るための行ないです、と食い下がらんばかりの言い方です。

- ②まだ一つだけ欠けたものが（22）「**イエスはこれを聞いて、その人に言**

われた。『あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。』

すると、イエスは役人の自信の急所を突くようにして言われました。彼の存在の本質に迫るものでした。彼に持ち物を売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そして天に宝を積みなさい。その上で、『わたしに従ってきなさい』と命ぜられたのです。

- ③金持ちだったから (23)「すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。」

この役人は、イエスの一撃を受けると、顔を曇らせ、悲しみながらその場から去りました。この人は、多くの財産をもっていたので、それを捨てるわけにはいかないと思ったのです。

3. 捨てて従う価値 (24～30 節)

- ①裕福な者が神の国に (24～25)「イエスは彼を見てこう言われた。『裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。』」

イエスは言われます。『金持ちが神の国に入ることは何と難しいことでしょう。裕福な人が神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがやさしい』。ここの「らくだが針の穴を」という部分については、エルサレムの城壁にある「針の穴」という門のことだという解釈もありますが、素直にらくだが針の数ミリの穴を通るくらい難しい、と解釈して良いと考えられます。イエスさまは金持ちの救いについての問題提起をされているのです。

- ②だれが救われるのか (26～27)「これを聞いた人々は言った。『それでは、だれが救われることが出来るのでしょうか。』イエスは言われた。『人にはできないが、神にはできるのです。』」

これを聞いた人々(他の福音書では「弟子たち」)は、驚きながら『それでは誰が救われることができるのでしょうか』と尋ねました。すると主イエスは『人にはできずとも、神にはどんなこともできるのです。』と答えられました。

- ③神の国のために (28～30)「すると、ペテロは言った。ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。イエスは彼らに言われた。『まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。』」

そのときに、ペテロは言います。『私たちは家を捨ててあなたに従ってきました。』と弟子たちを代表して述べました。これに対し、主イエスは、『神の国のために、家、妻、両親、子どもを捨てて来た者は、幾倍も受け、後の世では永遠のいのちを受ける』と言われ、捨てて従う価値を教えられました。

《結論》

ある人は、この役人に同情するかもしれません。しかし、この記事を見ると、彼がイエスの言葉を受けて、あまりにもあっさりとイエスのもとを去って行ったということが気になります。19 章で読むことになる、取税人ザアカイも裕福な人でしたが、イエスの教えを聞いた後、施すべきは施し、だましたものは返し、新しい歩みを始めました。救われたのです。この役人が求めていた永遠の命を、ザアカイは得たのです。ところが、この役人はイエスの話をさらに聞こうとすることもなく、去って行ったのです。彼にはそれまでの生き方に固執しました。それは、自分が中心という生き方です。つまり、役人は律法をしっかりと守って生きているという信念と自信がありました。しかし、どうしても明け渡してはいない自分というのがありました。律法遵守と言っても、まず自分があって、律法は都合の良いように理解したと考えられます。そこで、彼は神に従うということとは出来なかったのです。

イエスは、「あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」と言われました。実を言うと、ここでイエスが教えようとされているのは、「捨てて生きる」(9:23, 24)という道でした。それは生き方の問題でした。彼が頑なに守っているのは財産のように見えますが、実を言えばその生き方でした。頑なな自己があって、それを大きな財が守っているという構造でした。永遠の命を得るための行いを求めてきた彼は、自分を捨てて従えと言われて即座にそこを去ってしまいました。自分という城があり、それを取り囲んでいる財という城壁を崩されると思ったのでしょうか。確かに、それは彼にとって、「らくだが針の穴を通る」くらい、難しかったでしょう。しかし、主イエスは知っていました。後にクリスチャンになるザアカイはその城を、すんなりと明け渡すことになることを。役人はこの堅い心こそ砕かれなければならなかったのです。人間の力ではできなくても神はそのことをなさせてくださるのです。

この出来事について、ヒントが讃美歌 243 にあります。1 節「ああ主のひとみ、まなざしよ。きよきみまえを、去りゆきし、富める若人、みつめつつ、なげくはたれぞ、主ならずや」とありますが、主はこの富める若者を、愛のまなざしを注ぎながら、主に従うことを待っておられました。しかし、彼は離れていきました。主は悲しそうに見つめられていました。イエスの所に来た当初から、この役人は、イエスの目を見ようとしていなかったのではないのでしょうか。「尊い先生」と呼びかけているのですが、イエスに相対して、主なる神を求める心が見当たらないのです。イエスの眼差し見て、この方にすがる思い、従う心があれば、道は開かれたかもしれません。要するに、イエスさまに向き合っていないかったのです。ザアカイは木の上でイエス様と目が合ったことでしょう。不信のトマスも三回主を否定したペテロも、主に向き直りました。

イエスと向き直るというのは、悔改めることです。向き直れなかった役人を同情し、残念だと思うなら、私たちは主に真正面から向き合いましょう。そして、この方の眼を見つめるつもりで、この方にお従いしていきましょう。